

大学への進学動機と学校適応感との関連

磯部 有希*・上村 佳世子**

Key Words: 学校適応感, 進学動機, 大学生, 学科別

本研究は大学生の学校適応感について、進学動機と現在の大学生生活の要因がどのように影響するかを検討することを目的とした。進学動機は学科の持つ特徴によって異なると考えられるため、保育学科と心理学科で比較を行った。共分散構造分析の結果、保育学科では進学動機が適応感に与える影響が心理学科よりも大きく、大学生活の中で最も重視される要因は友人との関係であることが示された。一方、心理学科では、進学動機は保育学科ほど適応感には大きな影響はなく、大学生活の中での教員との関係や学業も、友人との関係と同様に適応感に結びつく重要な要因であることが明らかになった。このことから、保育学科と心理学科では学校適応へのプロセスが異なると考えられた。また、大学への満足度の高い学生は適応感も高いことが保育・心理の両学科で示され、学校適応と大学への満足は密接に関連していた。これらの結果は大学教育のあり方に一つの示唆を与えるだろう。

問 題

現在、不登校やいじめなど学校適応に関する問題が注目を浴びている。学校適応を規定する要因については様々な研究がされており、学校適応は一つの要因によってのみ規定されるとは言えない。例えば、吉村（1997）は、部活動と学校生活への適応感について調査を行い、部活動への満足度が高い部員は学校生活全体への満足感も高いことを見出し、部活動の満足のためには自己表現・主張を行うことが重要であると述べた。また、酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村（2002）は、親および親友との信頼関係と中学生の学校適応について測定した。その結果、子が親に抱く信頼感は学校適応に関連がみられる一方で、親が子に抱く信頼感は学校適応には関連が無いこと、また親友との信頼関係においては、親との相互信頼関係があまり形成されていない家庭の子どもであっても、親友との信頼感の高さが学校での適応を良くする要因と

* 大学院人間学研究科

** 人間学部心理学科

して働くことを示した。嶋田（1998）の研究は、学校ストレスと学校不適応の関連性について、さまざまなストレス反応を表出する児童生徒は、主観的な学校不適応感を抱いていることを明らかにした。また、大久保（2005）は、学校生活の要因（友人との関係・教師との関係・学業）と学校への適応感について学校別に検討を行い、友人関係はどの学校でも学校への適応感に強い影響を持つが、教師との関係や学業といった要因が適応感にどのように影響するかは学校によって違いがみられることを明らかにした。佐藤（2001）の研究では、積極的な動機で進学した場合には進学後の適応感は高くなり、消極的な動機で進学した場合には適応感は低くなる可能性があることが示された。

このように適応についての研究は数多く報告されているが、大久保（2004）が適応を「個人と環境の調和」と定義づけ、適応と、欲求や性格特性などの個人の特徴とは無関連であると述べたように、適応・不適応が個人の性格特性によって決まるとは考えにくい。そして適応を環境との調和と定義づけるなら、適応感とは「個人が環境と適合（フィット）していると意識すること」と考えられ（大久保・青柳，2003）、適応感を測るには環境の要因を含めて測定する必要がある。また、周囲から見ると適応していると思われるような学生が、自分では適応していないと考えたり、どう見ても適応していないだろうと思われるような学生でも自分では適応していると感じていたりすることがあるだろう。つまり適応感とは主観的なものであり、その測定には個人が環境をどのように捉えるかといった要因を含めることが有効的であると考えられる。

大学環境をどのように捉えるかの一つの指標となるものは、大久保（2005）の作成したような、現在の大学生活についての尺度であろう。大学生活についてどのように感じているかは、個人の大学環境への捉え方を明らかにするもので、学校適応への影響も大きいのではないかと考えられる。また、学校適応について友人との関係を踏まえた研究が多いように、大学生活の中で、友人との関係は適応感へかなり大きな影響を持つのではないだろうか。そこで、現在の大学生活について、「仲の良い友人がたくさんいる」などの友人との関係、「先生は生徒の気持ちに分かってくれる」といった教員との関係、「授業の内容を理解している」などの学業、という3要因のうち、どの要因が適応感に影響するのかを学科別に検討した。これは進学動機が学科で異なると考えられるように、大学生活も学科によって異なる特徴を持つ可能性が考えられるためである。

大学環境を個人がどのように捉えているかのもう一つの指標となるものに進学動機がある。大学環境の捉え方には現在の大学生活の中で得たものだけが影響するのではなく、その大学に入学する前に大学というものをどのように位置づけていたか、なぜその大学へ進学したいと考えたのか、という進学動機も影響しているのではないだろうか。特に大学進学率が高くなったとはいえ大学へ進学することが当たり前ではなく、多くの人が何かしらの動機を持って大学に入学してきたと思われる。そして佐藤（2002）の調査で明らかにされているように、興味のあることを深く学びたい・資格を取りたいといった積極的な進学動機は大学への適応感

を高め、特に目的は無い・誰かに勧められたなどの消極的な動機は不適応に繋がりがやすいのではないかと考えられる。大学への進学動機は個人によって異なることが予測されるが、学部や学科によってある程度進学動機の特徴というものが存在するのではないかと考えられる。例えばその学部あるいは学科でしか取れない資格がある場合では資格取得が大きな目的となり、資格取得に関連するものが進学動機の大部分を占め、それが適応感と関連するのではないかと考えられる。一方資格取得を目的としない学部や学科では、興味のある分野を学びたいなど学問領域の学習そのものが進学動機となり、適応感と関連すると考えられ、進学動機と適応感の関連を見るには学部や学科ごとに検討する必要がある。

目 的

本研究は、(1) 進学動機と大学生活の要因がそれぞれ大学生の学校適応感にどのように影響するのか (2) 大学以外で居場所を感じるときはどのようなときかについて、学科別に検討することを目的とした。大学への進学動機については学科によって異なる特徴が見られると考えられることから、ここでは資格取得および就職後に必要となる高いスキルの習得を主な目的とした保育学科と、資格取得を特に目的としない心理学科について比較した。保育学科と心理学科ではそれぞれ異なる要因が適応感に影響を与えることが予想された。そしてどちらの学科も、特に目的は無いなどの消極的な進学動機は共通して適応感を低くすると考えられた。また、現在の大学での大学生活について「友人との関係」「教員との関係」「学業」という3要因のうち、どの要因が適応感に影響するのかを学科別に検討した。大学への適応感は学校への満足度と強い関連があると考えられたため、満足度がどの程度あるかも尋ねた。また、大久保(2005)の研究から、大学生活の要因が適応感に影響を与えると予測され、大学で何をしたいかといった進学動機は大学生活を規定するものではないかと考えられる。そこで、進学動機から学校適応感までの過程のモデルを Figure 1 のように仮定し分析を行った。最後に、大学生活以外の場面で居場所を感じるようなときについて尋ねた。これは大学での友人関係や学業などの学校生活が上手くいかなくても大学以外に居場所を感じることがあれば、それが学校適応感へポジティブな影響を与える可能性があるのではないかと考えられ、今後、学校適応感を測定する際の重要な指標の一つになることが想定されたからである。

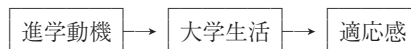


Figure 1 学校適応感までの過程モデル

方 法

調査対象者

大学生 215 名に質問紙を必修科目の授業内で配布し、心理学科の 1 年生 83 名（男性 34 名，女性 48 名，性別未記入 1 名），保育学科の 1 年生 109 名（男性 11 名，女性 98 名），計 192 名を対象者とした。授業を履修していても，他学科の学生や 1 年生以外の学生は対象としなかった。保育学科では幼稚園教諭一種免許状と保育士の資格を取得することができ，大部分の学生がこれらの取得を目指している。心理学科で取得できる資格は高等学校教諭一種免許状（公民）であるが，これは学生全員が取得するものではない。

調査時期

心理学科は必修授業の 2 クラス，保育学科は必修授業の 1 クラスにおいてそれぞれ 2006 年 6 月に調査を行った。

質問紙の構成

大学生生活尺度：大久保・青柳（2004）の中高生用学校生活尺度 20 項目を用いた。この尺度は，友人に好かれている，友人といると楽しいなどの「友人との関係」7 項目と，先生は分かりやすく教えてくれる，先生は生徒に公平に接してくれるなどの「教員との関係」7 項目，授業の内容を理解している，勉強に楽しく取り組んでいるといった「学業」の項目 6 項目からなるものである。

適応感尺度：大久保・青柳（2005）の青年用適応感尺度 30 項目を用いた。

進学動機尺度：栗山・上市・齊藤・楠見（2001）の進学動機尺度 25 項目を用いた。

以上の大学生生活尺度・適応感尺度・進学動機尺度の回答方法は，「1：全くあてはまらない」「2：あまりあてはまらない」「3：どちらでもない」「4：ややあてはまる」「5：非常によくあてはまる」の 5 段階評定であった。

大学への満足度：大学に満足しているかどうかを，「1：非常に不満である」「2：不満である」「3：どちらでもない」「4：満足である」「5：非常に満足である」の 5 段階で尋ねた。

大学以外での居場所：大学生生活以外で居場所を感じるときがあるか，あるとしたらそれはどのようなときかを自由記述で求めた。

結 果

学校適応感尺度の検討

大学への適応感尺度 30 項目について，保育学科・心理学科ごとに行った因子分析の結果，因子構造に大きな相違は見られなかったため，両学科を合わせて全体で最尤推定法による因子分析を行った（Promax 回転）。結果，3 因子が得られた（Table 1 参照）。第 1 因子は「これか

らの自分のためになることができる」「やるべき目的がある」「好きなことができる」など学生自身が課題や目的をもっていると感じていることを示す項目からなっているので、「課題・目的の存在」の因子と名づけた。第2因子は「周りから期待されている」「周りから頼られていると感じる」など周りからの信頼や受容されているという感覚を示す項目からなるので「被信頼・受容感」の因子と名づけた。第3因子は「安心する」「リラックスできる」など居心地の良さを表す項目からなるので「居心地の良さの感覚」因子と名づけた。この結果は先行研究

Table 1 大学への適応感尺度の因子分析結果

＜項目＞	課題・目的 の存在	被信頼・ 受容感	居心地の良 さの感覚	共通性
これからの自分のためになることができる	.817	-.049	-.130	.524
やるべき目的がある	.809	.091	-.177	.572
将来役に立つことが学べる	.806	-.049	-.023	.593
成長できると感じる	.736	-.031	.047	.563
充実している	.597	.034	.241	.623
好きなことができる	.564	-.127	.329	.549
熱中できるものがある	.425	.137	.190	.423
幸せである	.415	.009	.357	.491
周りから期待されている	.018	.821	-.034	.657
周りから頼られていると感じる	.006	.783	.000	.617
周りから必要とされていると感じる	.066	.770	.115	.774
良い評価がされていると感じる	.173	.745	-.173	.556
周りから関心をもたれている	.146	.661	.048	.601
存在を気にかけられている	.047	.396	.088	.231
安心する	.159	-.057	.759	.694
リラックスできる	.187	-.143	.746	.632
周囲となじめている	-.071	.248	.694	.670
自分と周りがかみ合っている	.037	.180	.691	.694
周囲に溶け込んでいる	-.073	.306	.683	.726
自由に話せる雰囲気である	.191	.056	.667	.695
ありのままの自分を出せている	.072	.100	.612	.522
周りの人と楽しい時間を共有している	.269	.140	.493	.616
周りに共感できる	.158	.119	.481	.449
周りと助け合っている	.235	.147	.392	.444
固有値	35.792	5.127	3.295	
寄与	2.365	2.430	2.410	
累積寄与率	2.365	4.795	7.205	

Table 2 大学への適応感尺度の因子間相関

	課題・目的の存在	被信頼・受容感	居心地の良さの感覚
課題・目的の存在	—		
被信頼・受容感	.497	—	
居心地の良さの感覚	.614	.582	—

である大久保（2005）の第1因子から第3因子までの因子構造とほぼ同じであり、第4因子とされた「劣等感の無さ」因子に含まれた項目については今回の結果ではいずれも因子負荷量が低く、採用されなかった。

進学動機尺度の検討

大学への進学動機尺度 25 項目について、保育学科・心理学科ごとに行った因子分析の結果、

Table 3 大学進学動機尺度の因子分析結果

＜項目＞	社会的 地位志向	自己興味 志向	資格志向	共通性
社会に通用する肩書きが必要なため	.883	-.168	.075	.704
大学・短大卒等の肩書きがほしいため	.867	-.201	.059	.676
高卒では嫌だから	.758	-.095	-.020	.546
周りのみんなが行くものだから	.738	.461	-.021	.954
就職後、より高い役職に就くため	.682	.094	.103	.510
高い社会的地位を得るため	.622	.159	-.144	.498
親孝行のため	.603	.149	.054	.439
就職後、多くの収入・給与を得るため	.554	.347	.016	.541
就職に有利なため	.537	.056	.257	.351
両親が勧めるため	.500	-.036	-.027	.245
他にやりたいことがないので	.443	-.101	-.440	.444
知的好奇心を満たすため	.042	.802	-.175	.617
自分にあった職業を探すため	.041	.712	-.129	.491
得意とすることを追求するため	.006	.605	.258	.524
自分の才能を伸ばすため	-.081	.601	.222	.471
幅広い教養を身につけるため	-.015	.583	.205	.446
青春をエンジョイするため	.080	.564	-.083	.332
興味のある分野を深く掘り下げるため	-.161	.537	.419	.585
人生の視野を広げるため	-.129	.505	.348	.467
同じような目的を持った友人を得るため	.235	.469	-.050	.331
資格をとるため	.146	-.048	.795	.602
専門的な知識や技術を身につけるため	.048	.200	.783	.743
特に目的はない	.131	-.007	-.782	.656
進学しないと希望の職業の資格が取れないため	.287	-.137	.755	.539
自由な時間がほしいため	.274	.337	-.404	.353
固有价值	6.720	4.543	1.803	
寄与	4.552	3.205	2.976	
累積寄与率	4.552	7.757	10.733	

Table 4 大学進学動機尺度の因子間相関

	社会的地位志向	自己興味志向	資格志向
社会的地位志向	—		
自己興味志向	.291	—	
資格志向	-.115	.288	—

因子構造に大きな相違は見られなかったため、こちらも両学科を合わせて主因子解法による因子分析を行った（Promax 回転）。その結果、3 因子が得られた（Table 2）。第 1 因子は「社会に通用する肩書きが必要なため」「就職後、より高い役職に就くため」など、肩書きや就職後の待遇など社会的地位を得ることを目的にする項目からなり「社会的地位志向」の因子と名づけた。第 2 因子は「知的好奇心を満たすため」「興味のある分野を深く掘り下げるため」など自分の興味や好奇心に関する項目からなり「自己興味志向」の因子と名づけた。第 3 因子は「資格をとるため」「専門的な技術や知識を身につけるため」といった資格取得を目的とするような項目からなり、「資格志向」の因子と名づけた。

各要因の共分散構造分析

Figure 1 に示したように、学校適応感へ至る過程のモデルを、進学動機→大学生活→適応感と設定し、モデルを検討するために保育学科・心理学科それぞれで共分散構造分析を行った。潜在変数は、「進学動機」「大学生活」「適応感」とし、観測変数については因子分析の結果から、各因子の下位尺度を用い、「大学生活」では「友人との関係」「教員との関係」「学業」という 3 因子を観測変数として用いた。

Figure 2 および Figure 3 に示したように、保育学科では進学動機から大学生活へのパス係数が.563 と心理学科よりも高く、進学動機が大学生活に与える影響は心理学科よりも強いと考えられる。大学生活と適応感はいずれの学科でも強い関連を示し、大学生活が適応感に与える影響は強いことが示された。潜在変数から観測変数への影響指標は、進学動機と適応感について

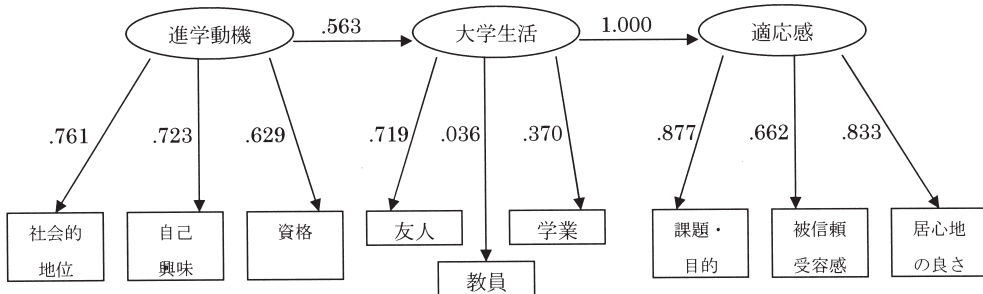


Figure 2 進学動機から適応感へ至るモデル（保育学科）

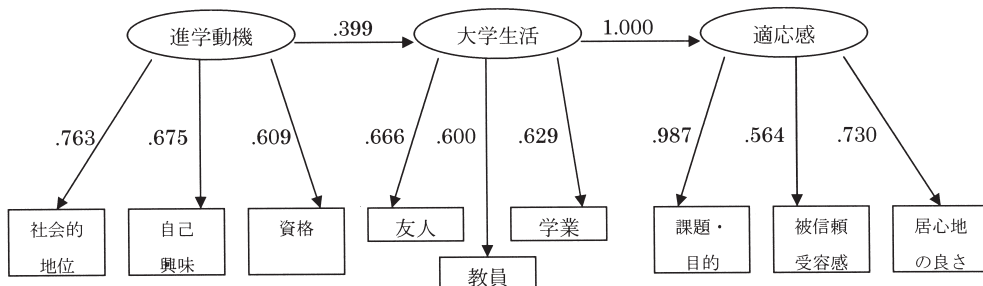


Figure 3 進学動機から適応感へ至るモデル（心理学科）

ては保育学科・心理学科のどちらも高い値が示され、潜在変数と観測変数が適切に対応していると考えられるが、大学生活については、保育学科で、教員との関係と学業という下位尺度への影響指標が低かった。心理学科では教員との関係や学業への影響指標も友人との関係と同程度の値を示したが、保育学科では友人との関係への影響指標のみが強いという結果になった。

大学満足度の高低と学校適応感の関連

大学満足度についての回答で、「5：非常に満足である」あるいは「4：満足である」と回答されたものを満足度高群とし、「3：どちらでもない」「2：不満である」「1：非常に不満である」と回答されたものを低群として、高群と低群で、学校適応感尺度の尺度得点について平均値の差の検定を行った。その結果、保育学科では満足度高群が72名（適応感の平均：111.75, SD：11.92）、満足度低群が31名（適応感：90.74, SD：17.09）であり、1%水準で有意差がみられ、満足度高群の方が満足度低群よりも学校適応感が高いことが示された ($t(101)=6.22, p<.01$)。心理学科では満足度高群が36名（適応感：108.11, SD：15.20）、満足度低群が45名（適応感：86.42, SD：14.71）であり、1%水準で有意差がみられ、保育学科と同様に、満足度高群の方が低群よりも適応感が高いことが示された ($t(79)=6.50, p<.01$)。

居場所を感じる时候についての分析

自由記述で求めた、大学以外で居場所を感じる时候について回答があったものから、学科ごとに居場所として回答されたものの割合をグラフにまとめたのが Figure 4 である。延べ回答数は保育学科 162 例、心理学科 126 例、合わせて 288 例であった。居場所として挙げられたものは、家族や友だちといるときなど、人と関わる中で居場所を感じる「親しい他者」、自室にいたりときやリビングにいたりときなどの回答であった「家庭内」、読書や音楽鑑賞など屋内での趣味「趣味（屋内）」、スポーツをしているときや大学以外のサークル活動などの屋外の趣味「趣味（屋外）」、「アルバイト」、「その他」（ボーっとしているとき、地元や原宿といった

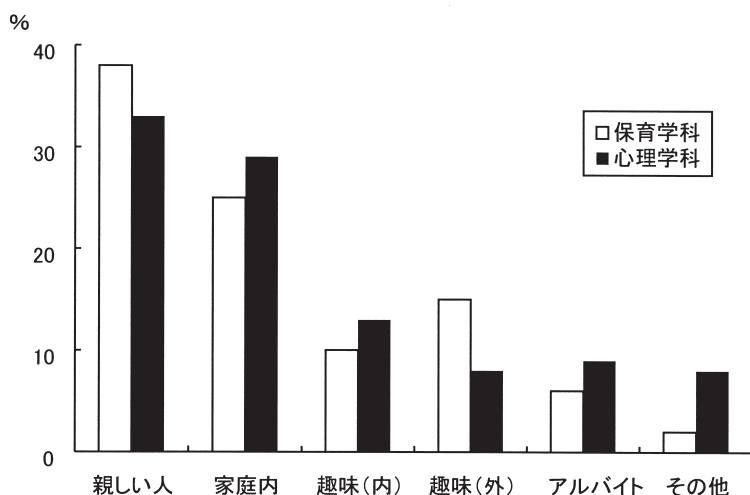


Figure 4 学科ごとの居場所を感じる时候の割合

特定の場所など)と分類した。居場所については複数回答も可とし、グラフは回答全体からの割合を示したものである。保育学科では、心理学科に比べて家庭外における趣味を挙げる回答が多く、人と関わる中で居場所を感じると回答した割合も多かった。心理学科では家庭内そのものを挙げる割合が保育学科に比べて多く、屋内での趣味も多かった。

考 察

本研究は、大学生の学校適応感について、大学への進学動機および大学生生活の要因がどのように影響するかを検討した。そして大学への進学動機は、学科の持つ特徴によって異なることが考えられるため保育学科と心理学科の学生間で比較を行った。まず、因子分析の結果から、適応感尺度からは「課題・目的の存在」「被信頼・受容感」「居心地の良さの感覚」という尺度が、大学進学動機尺度からは「社会的地位志向」「自己興味志向」「資格志向」という尺度が見出された。さらに共分散構造分析の結果、進学動機から大学生生活へのパス係数は、心理学科よりも保育学科で値が高く、保育学科では進学動機の大学生生活への影響は心理学科よりも大きいと考えられた。そして大学生生活から適応感へのパス係数は、保育学科・心理学科のどちらの学科でもかなり高い値を示し、現在の大学生生活が適応感に強く影響することが示された。以上のことから、保育学科では進学動機→大学生生活→適応感のモデルはある程度実証できたと思われるが、心理学科では進学動機が保育学科ほど強くは大学生生活に影響しないということが示された。つまり、保育学科では入学する前に持っていた大学への目的意識を、入学後も持続させ続けることが適応感に影響を与ええると言える。しかし、心理学科では進学動機から大学生生活への影響が高くなかったように、進学動機がたとえ積極的なものでなく、誰かに勧められたなど、目的意識がはっきりせず消極的なものであったとしても、その後の大学生生活の中での教員との関係や、学業への取り組みなどによって適応感が高められるという可能性を示唆した。

各潜在変数からそれぞれの観測変数への影響指標については、進学動機から各観測変数への影響指標は保育学科・心理学科のどちらでも比較的高い値を示した。このことから、それぞれの観測変数と進学動機は適切に対応していると考えられる。大学生生活については、保育学科と心理学科とでいくつか違いがみられた。まず、どちらの学科でも「友人との関係」は大学生生活からの影響指標の値が高く、友人との関係が大学生生活をかなり説明する要因となっていることが示された。これは友人関係が適応感にも強く影響していることを示唆しており、「友人と一緒にいると楽しい」「友人に好かれている」など友人との関係を肯定的に捉えていると適応感を高めるのではないかと考えられる。友人関係が学校適応感に影響することを示した研究は数多くあり(例えば、大久保,2005; 酒井ら,2002)、その中でも大久保(2005)は友人関係と適応感との関連について青年期は友人関係の重要性が高まる時期であり、例えば不登校の原因として友人関係上の問題が挙げられることが多いように、友人との関係が学校への適応感と最も関連していたのだと考えられると述べている。大学生では友人との関係が、大学における対人

関係の中で最も多くの割合を占めるとみられ、そのため適応感に最も影響する要因として働いたと考えられた。そして、大学生活から「教員との関係」への影響指標であるが、これは学科によって異なる特徴を持つ結果となった。心理学科では、教員との関係は友人との関係と同様に、大学生活に強く影響したが、保育学科ではほとんど影響していなかった。つまり、保育学科では教員との関係は、大学生活を説明するものではなく、大学生活と「学業」についても同様の結果が示された。それに対して心理学科では「学業」についても高い値を示した。以上のことから、大学生活の要因を予測するものとして、「友人との関係」「教員との関係」「学業」が、心理学科では重要なものであったが、保育学科では「友人との関係」が他の二つの要因に比べて、かなり大きく大学生活に関わるものであったと考えられた。これらの結果は、学科によって学生が重視する大学生活の要因のバランスが異なることを示唆するものであった。保育学科では、大学生活において友人との連帯感や友人との関係が良好であることが最も適応感を高める要因として働くが、心理学科では友人との関係だけでなく教員との関係や学業の要因も適応感に影響するものと考えられた。しかしこれは保育学科では友人との関係だけを重視していれば学校適応が上手くいくという結果を示したわけではなく、進学動機と大学生活が関連し、その結果適応感に影響していたように、入学前に持っていた目的意識を、入学後も持続させ続けることが適応感に影響を与えとも言え、そのためには教員の働きかけや学業も重要な要因となる。また、心理学科では、それほど強い目的を持たずに進学してくる学生に対し、教員が、大学生活の中で学業への興味を抱けるような働きかけを行うことが学生の学校適応には必要であると考えられた。

学校適応感と満足度との関連について、適応感の高群と低群とで検討を行ったところ、保育学科と心理学科のどちらの学科でも適応感の高い者ほど大学満足度は高く、適応感の低い者は大学満足度も低いという結果になった。このことから適応感と満足度は密接に関連し、適応感が大学への満足に強い影響力を持つことが示された。また、大学以外での居場所について分析した結果、ここでも学科ごとに異なる特徴を示した。全体的に、人との関係や家にいるときに居場所を感じると回答した率が高かった。しかし保育学科では、より親しい他者との関係の方に居場所を感じるのに対し、心理学科では家庭内にいることの方が居場所を感じるという回答が多かった。趣味についても保育学科ではサークル活動やライブに行くことなどの外に出での趣味で居場所を感じる割合が多いのに対し、心理学科では読書や音楽鑑賞などの屋内での趣味で居場所を感じるという回答の方が多かった。これは、進学動機だけでなく、その学科に進学してくる学生の志向も学科ごとの特徴があるという可能性を示唆している。

今後の問題

適応感への影響について、保育学科と心理学科で大きく異なったのは進学動機と教員との関係、学業であった。保育学科では進学動機が、心理学科では教員との関係がそれぞれ強い関連を示した。このことから、保育学科では大学に高い目的意識を持って入学してきた学生を、その目的意識を損なわせないように、仲間関係の維持と拡張、同じ目的意識を持った仲間同士の

連携などによって、環境を整えて学ばせることが学校適応において重要な要因となるものと考えられた。その環境づくりには教員も大きな役割を果たすはずであり、学校適応には教育者の力が必要不可欠であることが示唆された。心理学科では、人間の心のメカニズムについて興味は持っているが、十分な知識を持たずに入学してくる学生に対し、教員が、大学生活の中で学業への興味を抱けるような働きかけを行うことが学生の学校適応には必要であると考えられた。

しかし、進学動機は時代背景や学生の志向性の変化によっても異なると考えられ、進学動機についての尺度もそれに応じて改良する必要がある。また、大学生活の要因について、ここでは「友人との関係」「教員との関係」「学業」の3つのみで調査を行ったが、大学生活はその3つの要因のみで構成されるわけではない。サークル活動や先輩・後輩との関係やゼミの仲間との関係など、様々な要因が考えられ、今後はそのような要因を含めて大学生活を検討していく必要がある。また、居場所を感じるときの回答が学科によって特徴があったように、その学科へ入学してくる学生の行動傾向も異なると考えられる。また、対象とした大学以外の他大学では、同様の学科であっても状況は異なる可能性がある。大久保・青柳（2003）が述べたように、どのような特徴を持った個人がどのような特徴を持つ環境と出会ったときに適応感が高まるのかを更に詳しく分析する必要がある。それにはパーソナリティとの関連も含めて検討する必要があると言える。そして、今回の調査は1年生を対象とし、その調査時期も前期という比較的早い時期の調査であり、今後は後期や上級学年での調査も必要である。

引用文献

- 栗山直子・上市秀雄・齊藤貴浩・楠見孝 2001 大学進学における進路決定方略を支える多重制約充足と類推 教育心理学研究,49,409-416.
- 大久保智生 2004 新入生における大学環境への主観的適応に関する PAC（個人別態度構造）分析 パーソナリティ研究,13,44-57
- 大久保智生 2005 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討— 教育心理学研究,53,307-319.
- 大久保智生・青柳肇 2003 大学生用適応感尺度の作成の試み—個人—環境の適合性の視点から— パーソナリティ研究,12,38-39.
- 大久保智生・青柳肇 2004 中高生用学校生活尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 日本福祉教育専門学校研究紀要,12,9-15.
- 酒井厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 2002 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究,50,12-22.
- 佐藤典子 2001 音楽大学への進学理由の認知と進学後の適応について 教育心理学研究,49,175-185.
- 嶋田洋徳 1998 小中学生の心理的ストレスと学校不適応に関する研究 学校ストレスとストレスマネジメント 風間書房
- 吉村斉 1997 学校適応における部活動とその人間関係のあり方—自己表現・主張の重要性— 教育心理学研究,45,337-345.

（2007.12.12 受理）